こがね虫たちの夜

五木寛之

こがね虫たちの

五木寛之作品集　河出書房新社・一

こがね虫たちの夜 ©1970

昭和45年11月25日初版発行／昭和52年11月10日20版発行

著者 五木寛之 発行者 佐藤晧三

東京都新宿区住吉町95番地 発行所 株式会社 河出書房新社

電話東京(355)5311(代表) 振替東京0-10802

印刷・三松堂印刷 製本・中西製本 落丁・乱丁本はお取替いたします

定価はカバー・帯にあります

こがね虫たちの夜　5
聖者が街へやってきた　65
自由をわれらに　141
モルダウの重き流れに　181

カバー絵　ベン・シャーン

星くずとともに消え去った旅寝の夜々

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

こがね虫たちの夜

こがね虫たちの夜

1

何となく何事か起りそうな気配(けはい)というものがあって、そんな感じがあたしは好きだ。

風の強い晩だとか、急に空が暗くなる午後だとか、新聞でたてつづけに大きな事故が報じられるとか、そんな不吉(ふきつ)で凶々(まがまが)しい予感のする時というものがあって、そんな時、あたしはなぜかふっと生気(せいき)をおび、そわそわと嬉しくなるのだから不思議な気がする。

女のくせに平和で落ちついた状態というものが、なぜか好きでないのは、どういうわけだろう。お店にいる時でも、そんな気配があると、急にあたしの目が輝(かがや)き出すのだと達也が言う。

「ママは血が騒ぐたちなんだな」

と、客の絶えたカウンターの中で、いつか達也が呟いたことがあった。達也は二十代の半ばにさしかかった身綺麗な当世風の若者で、半年ほど前からあたしの部屋に泊るようになった、いわばあたしのつばめなのだ。貯金をはたいて四谷に出した小さなスナックの店が、どうにかやって行けるのは彼の才覚のせいかも知れない。いい男なのに、ちっとも二枚目ぶらず、夜おそくやってくるホステスたちや、男の客たちに、いつも快活な冗談を言って受けている。ちゃんとした一応の大学を出ているくせに、そんなことはおくびにも出さない利口さもある青年だった。

「あたしは駄目なのよ」

「何が?」

達也は帰って行った客たちの皿やグラスを片づけながら、あたしを振り返ってたずねる。

「駄目って、どういう意味?」

「駄目なんだ、あたし」

答えにならない答えだが、本当の気持ちだった。

「おまけよ、おまけ」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

「おまけ?」
「そう。いま生きてるのは、おまけ。本当のところはもう済んじゃってる」
「ニヒってるって言うんだろ、そういうの」
「そうかも知れない」
「さからわないんだな、ママはいつも」
「ごめんね、達也」
達也はふと動かしていた手を休めて、カウンターに両肘をつき、ぼんやりしているあたしをじっとみつめる。
「何を謝るんだい」
「本気で生きてられなくって、ごめんなさい」
「……」
感じのいい笑顔を見せて達也はあたしに手をのばす。ボタンの外れたブラウスの胸元から、すっと冷い手をさしこんで乳房をぎゅっと掴むと、
「もう閉めようか」
「ええ」

「表の看板ひっこめてくるよ」
「あたしがやるわ」
達也の手をそっとおさえて起ち上ると、ちょっと目まいがした。
「どうしたんだ」
「ちょっと――」
あたしはカウンターに両腕をついてつっぷすと、達也に言う。
「先に帰って。後はあたしが片づけて行くわ」
「またママの病気がはじまった」
よくあることだった。急に独りでいたくなってくる。理由もなく、時どきそうなるのだ。あたしは達也がとても好きだった。若い、疲れを知らない体も、こまかく気のつく控え目の性質も、申し分ない適当な愛人だった。だが、あたしは一月に一度か二度、無性に独りになりたくなる時があるのだ。
「車を呼んで先に帰って」
「うん」
達也は逆らわない。前に度々そんなことがあって、もうあたしという人間を扱うことをの

みこんでしまっているのだろう。達也は一応の片づけをすますと、あたしを残してタクシーで新宿のアパートへ先に帰って行った。

時計を見ると、朝方の四時だった。石油ストーブを消してしまうと、少し寒かった。師走の風が表で鳴っていた。何か異常なことの起りそうな、あたしの好きな気配がどこかにあった。あたしは店の中を暗くし、燈りを一つだけつけて、カウンターに坐った。国産のジンのびんと、水と、グラスを前において、独りだけの態勢をととのえた。そして、アラジンのランプのように、あたしの記憶を遠い夜の奥から呼び起こしてくれるいつもの歌を小声で口ずさんだ。

こがね虫は　虫だ
金倉建てた　虫だ
なぜ虫だ
やっぱり　虫だ

奇妙な歌だが、あたしには大切な歌だった。有名な童謡を、そんなふうに変形して口ずさ

むと、水中にアセチレンのかけらを放り込んだように、さまざまな記憶がぱあっと泡のように立ち上ってくる。それはもう終ってしまった季節の失われたテーマ・ソングであり、今では誰にも歌われなくなったあたしたち仲間だけの歌だった。

あれは昭和二十年代の終りかけた頃で、あたしはその頃まだ十九歳になったばかりの痩せた小生意気な少女だった。あの頃の事を思い返すたびに、あたしは今の自分がおまけの人生を生きているような気になってしまう。どう考えてみても、あの数年だけがあたしが本当に生きた、短い時期だったように思えてならない。

こがね虫は　虫だ

人気(ひとけ)のない暗いスナックの店で、独りジンを飲みながら、とりとめのない歌を口ずさんでいる三十半ばの女というものは、どう考えてもぱっとしたものではない。

たとえ、あの頃のように飢えや、寒さになやまされる事がなくなったとしても、やはりあの時代のほうが、あたしには生き生きと張りのある毎日だったように思う。何かが起こりそうな、そんな予感が毎日のようにあたしを満たしていたし、その通りにあたしたちの周囲に

は何事かが絶えず起こっていた。

今では、ただ待っているだけだ。外で風が吹き荒れたり、飛行機が立てつづけに落ちたりしても、それがあたしの待ち望んでいるようなことにはなりっこないことを、あたしはもう知っている。あたしはまだ少し美しく、小さなスナックを一軒もっていて、若い青年と一緒に暮している三十四歳の中年女に過ぎない。そして、もう二十年もたてば、達也とも別れて、古ぼけたこの店を細々とやっている疲れた顔の女主人になるのだろう。そして、一日に何度か、客の帰ってしまった店の中で、こがね虫の歌を小声で口ずさんで、ジンをなめて夜を過すのではなかろうか。それというのも、あたしは余りにも若いうちに短い充実した季節を浪費してしまったからだろう。あのきらめくような一時期を、十九歳の終りに持ったということは、果してあたしにとって幸福だったのだろうか。それとも不幸だったのだろうか。あたしには、わからない。ただ、こうして独りで想い出にふけっていると、体の奥に、ぽっと明るいランプの灯がともるような気がする。それは達也に説明してもわからないことなのだ。それは仕方のないことだと思う。

2

その頃、学生だったあたしは中央線沿線の中野を中心にさまよい歩いていた。

前年の春、九州の高校を卒業して、女子美術大学に入学したあたしは、ちょうど一年ちかくたった冬の終りに、中野の近くに自分の部屋を借りたのだ。地方の高校の教師をしている父親からの仕送りは、東京での学生生活を支えるには不自由すぎた。あたしは自分で家庭教師のアルバイトを探したり、日暮里(にっぽり)や秋葉原(あきはばら)あたりのタオル工場で働いたりして、不足分をおぎなって暮していた。

中野という街は、その当時はまだ今のような巨大な商業センターではなかった。駅をおりると北口の正面にちょっとした広場があり、汚れた犬が商店街の入口で小便をしていたりするような街だった。

あたしは中野の駅から歩いて十五分ほどの古い三畳の部屋を借りていた。せまい部屋だったが、あたしは満足だった。窓からは隣りの銭湯(せんとう)の石炭置場がすぐ目の前に見え、風のある日など石炭の粉が窓のすき間から部屋の中に舞い込んできてざらざらした。

あたしはその頃、ようやく、大学に幻滅を感じはじめていた時期だった。男の子のいない

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com